carded sys bibl

第27巻 第12号　Vol. 27 No. 12

植物研究雑誌

THE JOURNAL OF JAPANESE BOTANY

昭和27年12月　DECEMBER 1952

津村研究所

Tsumura Laboratory

TOKYO

目　次

Contents

〔表紙カットの説明は本誌26巻10號320頁參照〕

故 理學博士　中井猛之進氏
の在りし日の面影 (1952年7月鹿兒島にて)

東京大學名譽教授　國立科學博物館長　理學博士　中井猛之進氏は本年12月6日逝去された。茲に氏の半世紀に近い學究生活中に於ける幾多の貢献に對し敬意を表し，謹んで哀悼の意を表す。

Takenoshin NAKAI (1882—1952)

Dr. T. NAKAI, one of The most excellent botanists in Japan, died in Tokyo, on December 6th, 1952.

理學博士　牧野富太郎 創始　主幹 藥學博士　朝比奈泰彥

植 物 研 究 雜 誌

THE JOURNAL OF JAPANESE BOTANY

第 27 卷　第 12 號（通卷 第 299 號）昭和 27 年 12 月發行

Vol. 27 No. 12　December 1952

日　野　巖*: 種の特長か變態か

Iwao Hino*: Specific characteristics or malformation caused by pathogen?

はしがき　植物の variety 或は form と認められているもののうちに疾病による變形が相當に含まれていることは，既に人々によつて氣ずいていることであるが，私の氣ずいたものについて私見を述べてみたい。
ただ，畸形はその形質が遺傳的であるならば，これを獨立の variety 或は form と認めても差支えないが，それが一時的の現象であるならば獨立の variety 或は form とは認め難い。羊齒類の叉葉或はホザキ性は野外に於ても屢々見られる現象であるが，伊藤洋博士はその著，大日本植物誌でそれぞれ畸形と註記している。

斑入りも亦同樣であつて，一時的のものは獨立の variety 或は form とは認め難いが，その多くは遺傳的であるから，獨立の variety 或は form と認めることは差支えないように思う。

菌類による變形は，たとえ著しいものであつても，これは獨立の variety 或は form とすることは出來ない。Virus による病的變化についても亦同樣に考えられる。

1. ヒウガハンチク　この竹は田中芳男氏が明治 20 年 9 月に宮崎縣西諸縣郡高原町で發見されたものであつて，牧野富太郎博士は坪井伊助氏の日本竹類圖譜でマダケの一品種として *Phyllostachys bambusoides* S. et Z. forma *Tanakae* Makino とされたのを，後に中井猛之進博士が *Phyllostachys reticulata* C. Koch forma *Tanakae* Nakai と改められた。この竹の斑紋は遺傳的のものではなく，*Asterinella hiugensis* Hino et Hidaka なる子囊菌が寄生して圈紋を生じたものであるから，マダケの一品種とは認め難い（植物及動物，2 No. 7，拙著參照）。

斑竹として利用的見地からヒウガハンチクの名を存しておくことは望ましいことであ

---

* 山口大學農學部. Faculty of Agriculture Yamaguti University, Tyôhu-mati, Yamaguti Prefecture, Japan.
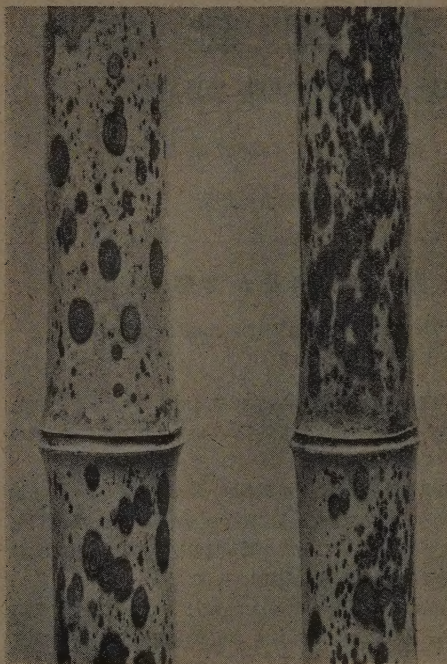
Fig. 1. *Phyllostachys reticulata* C. Koch infected with fungus. ヒウガハンチク

るが，學名としてマダケの forma とすることは贊成し難い。

2. キモンヒヨドリバナ　キモンヒヨドリバナは學名を *Eupatrium Fortunei* Turcz. var. *simplicifolium* Nakai, f. *aureo-reticulatum* Nakai といい，ヒヨドリバナの forma となつている。しかし，キモンヒヨドリバナはヒヨドリバナが Virus に犯されて生じた病態のものであることは，筆者が昭和 18 年に實驗的に證明している。この Virus は煙草ブライトイエロウ種に金剛砂による塗沫傳染が可能であり，潜伏期は割合に長く 32 日，感染煙草葉は葉基部及び葉緣が一帶に濃色になり，大きく皺曲し，黃小斑が全面に散布し，葉緣は反捲し畸形化する。小淸水卓二氏は，萬葉集に黃葉せる澤蘭とあるのをキモンヒヨトリバナにあてているから，昔から存在したものと見える。

3. ヨコメガシ　ヨコメガシはシマガシともいい，學名を *Quercus glauca* Thunb. var. *stricta* Makino といい，アラカシの園藝的一變種とされている。このコヨメガシは管理がわるいとすぐ通常のアラカシに變つてしまう。固定的の變種ではない。筆者はその病狀を北米で見られる pecan rosette などと極めて類似しており，形態的，生理的に見て，Virus 性の病態かと考えている。未だ積極試驗を行つていないが，Virus 性のものと考えて誤りないものと信じている。

なお，近緣のチリメンガシ (*Quercus phylliraeoides* A. Gray var. *crispa* Makino ウバメガシの變種) についても Virus 性のものではあるまいかと疑つている。

4. キンシナンテン　キンシナンテンは學名を *Nandina domestica* Thunb. var.
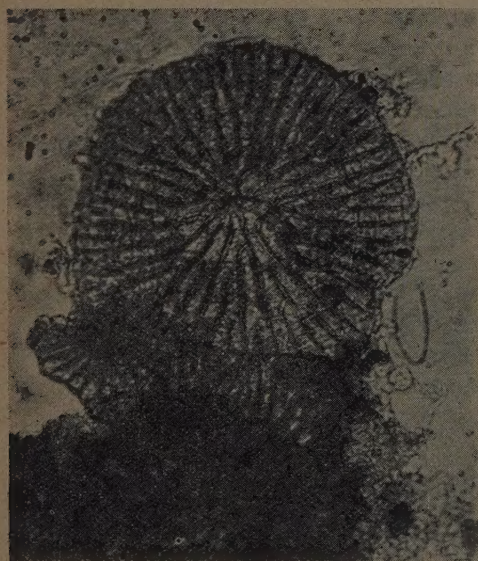
Fig. 2. *Asterinella hiugensis* Hino et Hidaka
ヒウガハンチク病原菌

capillaris Makino というが，これは細葉の園藝的品種とされていて，牧野富太郎博士は變種と認めている。ナンテンに Virus 病のあることは既に昭和8年に筆者がモザイツク及びその類似病に罹かる植物の目錄(宮崎高農學術報告, No. 5)中に記載しており，その病狀は細葉化することが最も著しい。それで，キンシナンテンとよばれているもののうちに少なくとも Virus 性のもののあることは疑もなく，筆者もこれを實見している。

5. チリメンマンリャウ

マンリャウのうちに葉の著しく皺縮した一品種があり，これには未だ學名が附けてないが，これはどうも Virus 性らしく思われる。筆者は先年山口縣豊浦郡豊西村印内の法林寺境内で見たが，老僧の話によると移植はなかなかむずかしいということであつた。接種試驗を未だ行つていないが，その形狀を詳細に觀察した結果, Virus 性であることはまず疑がないように思つている。

なお，これによく似たものにテイカカズラの Virus 病があるが　筆者

Fig. 3 *Ligularia Tussilaginea* Makino, probably infected with virus. ボタンツワブキ

は山口縣萩市指月山の山中で實見している。

6. ボタンツワブキ　ボタンツワブキというのは，葉緣が波うつてちぢれているツワブキの一園藝品種であり，牧野富太郎博士は *Ligularia Tussilaginea* Makino var. *crispata* Makino と命名しておられる。ところが，このボタンツワブキは早春には著しく Virus 的病徵を示すが，暖くなると病徵が masking して現われない。筆者はどうも Virus による變狀ではあるまいかと疑つているが，まだ確證をあげ得ない。

7. フイリマサキ　フイリマサキは *Euonymus japonicus* Thunb. var. *aureo-variegatus* Lowe(1865) といい，極めて普通の園藝品種であるが，この斑入には2種あつて，ひとつは遺傳的のもので，他のひとつは Virus 性のものであり，この兩者に時にはひとつの植物に併合して現われる。學名はそのいずれをもとにして設定したものであるか筆者は寡聞で知つておらないが，恐らく2種の斑入りを混同していることであろう。マサキの斑入りについては Bischkow (Biol. Zentralbl., **47** (1927)の研究がある。

なお，チューリップの花の斑入は昔は品種的特徵とされレンブラント種とよばれていたが，これは勿論 Virus 性のものである。

また，羊歯類でも Virus に犯されると白斑入りになることは,筆者が本誌，**10** No. 6 で報告したが，イワヒトデとヌカボシランで實例を認めている。

8. ホザキ性羊歯　羊歯類に葉の先端の分裂するものが多く，伊藤洋博士はシシホンダ，シシミゾシダ，シシコウモリシダ，シシオクマワラビ，シシゼンマイ，チリメンシダなどの例を擧げ，畸形としておられるが，遺傳的の畸形の外に，Virus によるものもあることは筆者が本誌 **10** No. 6 で報告しておいた。それで病的のものもあることは實事である。

Résumé

The malformation caused by pathogens is often mistaken for the specific characteristics which make a feature of distinct variety or form.

Phyllostachys reticulata C. Koch forma *Tanakae* Nakai is no more than a usual *Phyllostachys reticulata* C. Koch on which culm *Asterinella hiugensis* Hino et Hidaka is parasitic.

Eupatorium Fortunei Turcz. var. *simplicifolium* Nakai f. *aureo-reticulatum* Nakai is a virus-infected *Eupatorium Fortunei* Turcz. var. *simplicifolium* Nakai in the judgement on the inoculation experiments of the writer.

Quercus glauca Thunb. var. *stricta* Makino is probably to be a virus-infected *Quercus glauca* Thunb. which has a close resemblance to pecan rosette in the morphological feature. *Quercus phylliraeoides* A. Gray var. *crispa* Makino seems to be also a virus-infected form.

Nandina domestica Thunb. is susceptible to the virus disease. Its variety

capillaris Makino is to be a virus-infected form.

Bladhia crenata Hara and *Trachelospermum asiaticum* Nakai are susceptible to virus diseases. The form with crispate leaves is to be a virus-infected one.

Euonymus japonicus Thunb. var. *aureo-variegatus* Lowe has two types, one of which being hereditary and another pathological. The latter is to be a Virus-infected form.

The variety with crispate leaves of *Ligularia Tussilaginea* Makino is supposed to be a virus-infected one. The characteristics specific to virus disease is recognizable in early spring and entirely masked during the summer in the case of the variety *crispata* Makino.

Some species of ferns have the leaves with split edges. Its cause is often due to virus infection, though it is hereditary in some cases.

○古代裂に混在した蘚類（野口彰） Akira NOGUCHI: On some mosses found among the ancient Japanese silk-clothes.

法隆寺の古代裂に混在したと云われる一つまみ程の蘚類が朝比名泰彥博士から送りとどけられた。割合に利用方面の少い蘚類が，意外なところに發見されたのをみて，一寸びつくりした。この材料はどのくらいの年數を經過したものか十分には判らないが，色は褐色に變つていても組織はかなりよく保存されている。蘚の種類は 1) ミズスギモドキ *Aerobryopsis subdivergens* (Broth.) Broth. 2) サイコクサガリゴケ *Meteorium helmintocladulum* (Card.) Broth. var, *cuspidatum* (Okam.) Nog. 3) トサノサガリゴケ *Barbella Determesii* (Ren. et Card.) Fleisch. 4) セイナンヒラゴケ *Neckeropsis Lepineana* (Mont.) Fleisch. の4種で，量は 1) が大多數を占めて他は斷片にすぎない。4 種とも懸垂型の蘚で，4) を除いて本邦でも九州，四國の南部，近畿南部などの渓谷沿いの森林中では，これらが樹幹枝から垂れている特異な景觀に接するのは珍しくはない。4) は熱帶アジア，南太平洋諸島，東部アフリカ方面に分布して樹幹枝からも垂れ下るが，本邦では石灰岩上に限られて存在する。なお海外では，1) は臺灣，中國，マレー，3) は臺灣，ヒマラヤ，2) だけは本邦特產になつている。この材料が何れの地から得られたかは，にわかに決めにくいが，いずれも今もなお本邦の西南部には稀ではない。(大分大學學藝學部)

〔附記〕 本資料は昭和 27 年7月國立博物館の山邊知行氏から資源科學硏究所の林孝三氏に提供されたもので，古代裂の殘缺を納めた唐櫃から發見された由である。又此唐櫃には所謂法隆寺裂と正倉院裂の斷片が混在するので問題の蘚類が何れに由來するかは判然しない。いずれにしても往時裝身具などの詰物として使用された可能性が大きく，おそらく 1000 年前後を經過したものらしいとのことである。(朝比奈泰彥)

下村　孟*：局方粉末生薬の研究（4）

Tsutomu Shimomura*: Microscopical anatomy of powdered vegetable drugs in the Japanese Pharmacopoeia (4)

(5) **リンドウ末** Gentiana Japonica Pulverata. リンドウ末は根の粉末を主とし，若干の根茎及び莖の基部の末を伴つているので，根の末 (fig. 5, A) と根莖及び殘莖の粉末の主な要素 (fig. 5, B) とに分けて檢鏡圖を作製した。

Fig. 5 A　リンドウの根の末　　鏡檢圖 ×270

* 國立衛生試驗所. National Hygienic Laboratory, Setagaya-ku, Tokyo.

本粉末の色は暗褐色～淡黄褐色を呈し，濕氣を避ければ相當長期間の貯藏に堪える。

苦味の弱いエゾリンドウの根が市場に出廻つている現在では，これの粉末も當然使用されていると思われるが，リンドウ末と區別するのはやや困難である。又市場品にはモミガラ又は苦參の粉末を混入しているのがある（昭，24. 調べ）。

グリセリン水又は抱水クロラール・グリセリン液に浸して鏡檢すると，根の末では (fig. 5. A),

p 柔組織：長軸に延長したほぼ矩形を呈する皮部柔細胞の破片からなり，各柔細胞の配列は比較的規則正しく，修酸カルシウムの主として針狀晶，往々板狀又は砂狀晶を含有し，それら結晶は柔細胞の長軸の1方に偏在する。又スダン III に赤染し，アルコールに溶け易い油滴を含有する。

v 導管：ラ旋紋導管，環紋導管 **vg**（徑 10～20μ），階紋導管 **vc**（徑 20～25μ）又は網紋導管 **vr**（徑 25～30μ）からなり，往々偏壓された新生組織 **c** 及び薄膜で內容物の多い篩管 **s** を伴つている。まれに孔紋導管にはチロースを認めることもある。

ex 外皮：主として表面視 ex_1，まれに側面視 ex_2 として現われ，前者においては縱に長い大形の淡黃色の外皮細胞からなり，その膜はやや彎曲し一次膜はコルク化しているが木化せず，4～8 個（まれに約 14 個）の娘細胞に分かれ，往々娘細胞も 2 個に分裂しているものがある。スダン III 試液に赤染，アルコールに易溶の無色の油滴を含
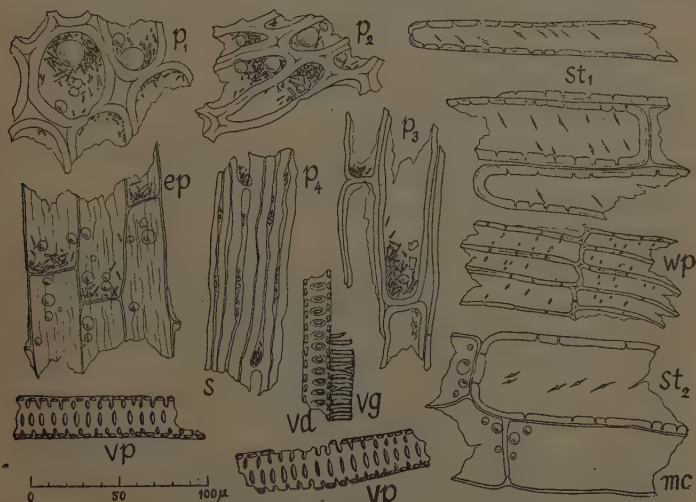
Fig. 5 B. リンドウの根莖及び莖の末 鏡檢圖 ×270

み，且つ粲状の内容物を認める。後者においては外皮細胞は不整5角形で娘細胞を認めるものがあり，外皮に次ぐ細膜はやや厚膜性である。

en 内皮：淡黄色の内皮細胞は大形であるから，その破片を認めるだけであるが，コルク化した一次膜にほぼ直角に交叉するセルローズ膜を有する横に長い娘細胞の多數を認める。表面に線紋を有し，前記外皮と同樣の内容物を含む。

cn 修酸カルシウムの針状晶：長さ 10〜50μ，通常 20μ 内外のものが最も多く，きわめて細長い 4 又は 6 角形を呈する。

cr 修酸カルシウムの板狀晶：ほぼ多角性の板狀晶で長徑 5〜20μ である。

cd 修酸カルシウムの砂状晶：徑 1μ 内外の細かい結晶からなる。

px 木部柔細胞：細長い多角形の柔細胞からなり，わずかに孔紋を有し，内容物は前記油滴を主とし，結晶は比較的少量である。

根莖の末を鏡檢すると，皮部柔細胞の形を異にし且つその膜が厚い他は根の末とほぼ等しい要素からなつている。内皮の娘細胞は多數で約 15 個に分裂しているが，粉末ではそれを認め難い。(fig. 5, B の p_1 及び p_2).

p_1 及び p_2 皮部柔組織：皮部柔細胞はほぼ圓形のもの (p_1) 及び不整形でやや偏壓された形のもの (p_2) の2種現われ，そのいずれも膜の厚さ 7〜12μ で厚く，根におけると同樣の油滴及び結晶を含有する。

莖の末を鏡檢すると (fig. 5, B の殘り),

p_3 一次皮部柔組織：口徑約 30μ のほぼ圓筒狀の長い柔細胞からなり，修酸カルシウムの針狀晶，まれに板狀晶を含み，油滴は少い。

p_4 二次皮部柔組織：やや厚膜の細長い柔細胞からなり，形はやや偏壓され，少量の結晶を含み，しばしば篩管 s を伴つている。

v 導管：主として徑約 25μ の孔紋導管 vp からなり，まれに徑約 15μ の重縁孔導管 vd 及び環紋導管 vg 又はラ旋紋導管を認める。

wp 木細胞：幅約 20μ のきわめて長形の木細胞の集りからなり，その膜は木化し細かい孔紋を有する。

st_1 皮部の石細胞：主として單獨で現われるが，まれに數個の集りを認められ，幅 20〜35μ の長形の石細胞からなり，膜の厚さ 6〜12μ で孔紋は明かである。

mc 髄細胞：ほぼ圓筒狀の長形の細胞で，その膜は薄く，前記無色の油滴を含み，まれに口徑 40μ に達する圓筒狀の石細胞 st_2 を伴う。

ep 表皮：主として表面視として現われ 長形薄膜の表皮細胞からなり，結晶及び油滴を含み，表面のクチクラには線紋がある。

(6) **オウバク末** Phellodendron Pulveratum. オウバク末は需要の多い市場性の高い粉末生藥の1つであるが，廉價のためか餘り僞和物を混有しているものがない。カンショ澱粉で僞和したものが1種認められただけである（昭 25，調べ），ベルベリンを抽

出した滓を粉末として用いることはないかとの疑念を懷いたが現在までは出會つていない。

色は鮮黄色であるがやや黄褐色を帶びたものもある。味は相當粘液性で，貯藏に際して虫害を受け易いものである。

グリセリン水又はグリセリン・アルコールに浸して檢鏡すると，(fig. 6)
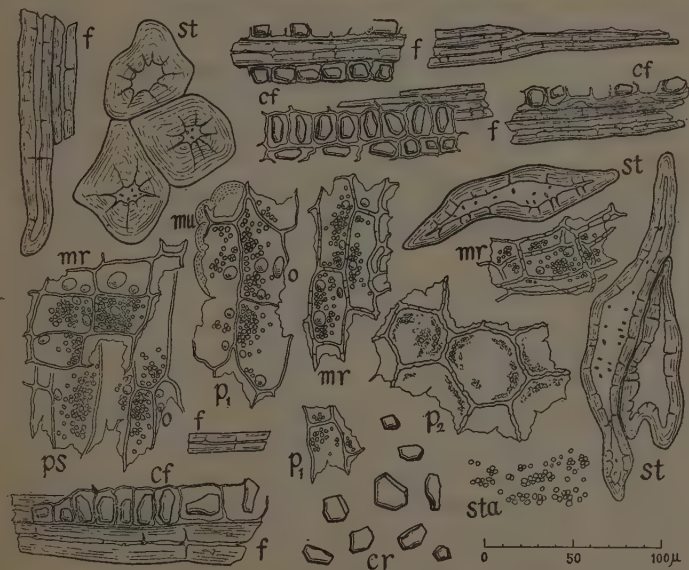
Fig. 6. オウバク末　檢鏡圖. ×270 (說明本文中)

f 纎維: 纎維束又は單獨の破片として現われ，黄色を呈しその膜の厚さ 5～10 μ，所々に孔紋を有し，しばしば結晶纎維を伴つている。

cf 結晶纎維: 概して纎維と共に現われる要素で，薄膜小形の柔細胞からなり，その各々に1個ずつの修酸カルシウムの單晶を包有している。

st 石細胞: 不整形であるがほぼ多角形～長形で，黄色を呈し單獨又は數個の集りとして現われ，膜の厚さ 5～15 μ 往々 20 μ 以上のきわめて厚膜のものもある。孔紋があり且つ層紋が明かである。

p1 皮部柔組織: やや長形薄膜の柔細胞からなり，小形澱粉粒粘液及び油滴を含む。

ps 師部柔組織: 長形薄膜の柔細胞からなり，しばしば髓線と直角に交叉して現われ，內容物は皮部柔細胞組織と等しい。

mr 髄線：ほぼ矩形〜長形の髄線細胞からなり，主として師部柔組織と直角に交叉して現われ，その膜は孔紋を有し，内容物はほぼ皮部柔組織と等しいが，油滴の量は他に比してやや多い。

p_2 最外側の皮部柔組織表面視；まれに現われる要素でほぼ多角形の柔細胞からなり，その膜はやや不整に厚化し孔紋を有し，絮状の内容物を認める。

cr 修酸カルシウムの單晶：徑 7〜20 μ の多角形を呈する單晶で，その數はきわめて多い。

sta 澱粉粒：徑 2〜6 μ の單粒を主とし，まれに 2〜4 個の複合粒を認める。ヘソ及び層紋は明かでない。

mu 粘液：髄線又は柔組織中に含まれ，ルテニウム・赤及びメチレンブルウに染まる。

O 油滴：皮部及び師部柔組織又は髄線中に油滴状となり存在し，アルコール，エーテル，アセトンに易溶，抱水クロラールに難溶，スダン III に赤染する。

Powdered Gentiana Japonica. Dark brown to pale yellowish brown powder of Gentiana Japonica root, with some fragments of rhizome and stem.

(1) **Root powder** (fig. 5, A). **p**: cortex parenchyma, the dispositions of oblong parenchymatous cells characteristically regular; containing chiefly needle crystals, occasionally solitary crystals or crystal sand, and some oil drops. **v**: vessels. such as spiral vessel, ring vessel **vg** (10–20 μ in diameter), scalariform vessel **vc** (20–25μ in diameter) or reticulate vessel **vr** (25–30μ in diameter); occasionally accompanied by cambium **c** and sieve tube **s**. **ex**: pale yellow exodermis, chiefly in surface view **ex_1** and rarely in lateral view **ex_2**; primary cell wall suberized, not lignified; exodermis cell divided into 4–8, rarely 14 daughter cells, containing oil drops, soluble in alcohol and colored by Sudan III T. S. **en**: pale yellow endodermis, very large cells, primary cell wall suberized, and crossed at right angles to daughter cells; on surface striated. **cn**: needle crystals of Ca-oxalate, 10–50μ, averagely 20μ in length. **cr**: solitary crystal of Ca-oxalate, polygonal, 5–20μ in length. **cd**: crystal sand of Ca-oxalate, each about 1μ in length. **px**: xylem parenchyma, oblong, containing oil drops and few crystals.

(2) **Rhizome powder** (fig. 5, B; **p_1**, **p_2**). The elements of rhizome powder are similar to root powder, except cortex parenchyma **p_1** and **p_2**: cortex parenchyma, spheroidal (**p_1**) and irregularly depressed (**p_2**); either thick-walled, 7–12μ in thickness.

(3) **Stem powder** (fig. 5, B). **p_3**: parenchyma of primary cortex, cylindrical, containing needle and rarely solitary crystals of Ca-oxalate, oil drops few. **p_4**: parenchyma of secondary cortex, oblong, rather depressed and thick-walled, containing few crystals; often accompanied by sieve tube **s**. **v**: vessels; mainly pitted vessel **vp** of about 25μ in diameter, rarely bordered pit vessel **vd** of about 15μ in diameter, ring vessel **vg** or spiral vessel. **wp**: wood parenchyma, oblong and about 20μ in width. **st_1**: stone cells of cortex, oblong and 20–35μ in width; wall 6–12μ in thickness and pitted. **mc**: pith, cylindrical cells of thin-walled parenchyma, containing oil drops; rarely accompanied by stone-cell **st_2**. **ep**: epidermis of stem, chiefly in surface view, oblong cells of thin-walled parenchyma, containing crystals and oil drops; on surface striated.

Powdered Phellodendron. Bright yellow powder of Phellodendron Bark.

f: fragments of yellow fiber bundle or fiber, with pitted walls, 5–10μ in thickness; often accompanied by crystal fibers. **cf**: crystal fiber, associated with fibers; containing single crystals of Ca-oxalate. **st**: yellow stone cells, with pitted and striated walls, 5–10μ, rarely 20μ in thickness. **p_1**: cortex parenchyma, containing small starch grains, mucilage and oil drops. **ps**: sieve parenchyma, often crossed with medullary ray cells; its contents are the same with cortex parenchyma. **mr**: polygonal medullary ray cells, containing the same with cortex parenchyma. **p_**: surface view of the outmost layer of cortex parenchyma, consists of polygonal cells, with pitted walls. **cr**: single crystals of Ca-oxalate, polygonal, 7–20μ in diameter. **sta**: single, rarely 2 to 4-compound starch grains, 2–6μ in diameter; hilum and lamellae indistinct. **mu**: mucilage masses in medullary ray and parenchyma, color by Ruthenium-red or Methylen-blue T. S. **O**: oil drops in medullary ray and parenchyma; soluble in alcohol, ether and aceton, color red by Sudan III T. S.

本 郷 次 雄*: 日本産きのこ類の研究 (4)

Tsuguo HONGO*: Notes on Japanese larger Fungi. (4)

(16) **Crinipellis stipitarius** (Fr.) Patouillard, apud Morot in Journ. Bot. 336 (1889) —— *Agaricus stipitarius* Fr. Syst. Myc. **1**: 138 (1821) —— *Collybia stipitaria* Gill. Hymén. 319 (1878)——*Agaricus caulicinalis* Pers. Myc. Eur. **3**: 156 (1828)——*Collybia caulicinalis* Quél. in Assoc. Fr. Avanc. Sc., Rouen, 498 (1883)——*Marasmius caulicinalis* Quél. Fl. Myc. 315 (1888)——*Crinipellis caulicinalis* Rea, Brit. Basid. 534 (1922)——*Marasmius caulicinalis* var. *scabellus* Quél. Fl. Myc. 315 (1888)——*Marasmius scabellus* Morgan, in Journ. Myc. **11**: 202 (1905)——*Marasmius epichloe* Fr. Hymen. Eur. 479 (1874)——*Androsaceus epichloe* Rea, Brit. Basid. 533 (1922)——*Marasmius gramineus* Pass. in Nouvo Giorn. Bot. Ital. **4**: 111 (1892).

Illustration: Cooke, Ill. Brit. Fungi. **2**: pl. 149, f. B (1881–1883); **7**: pl. 1136, f. A (1888–1890); Konrad et Maublanc, Ic. Sel. Fung. 8: pl. 221 (1934).

Pileus 7–14 mm broad, convex to broadly convex, expanding nearly plane; surface dry, somewhat zonate around the disc, covered with brown fibrils arranged in appressed fascicles, ground color whitish to brownish; margin incurved at first; context white, thin, odor none; lamellae adnatoadnexed, seceding, close to subdistant (L=21–27; l=1(2)), white, edges even, narrower in front; stipe 2–4.5 cm long, 1 mm± thick, equal, brown, blackish at the base, tough, pubescent; spores white in mass, oval, smooth, multi-guttulate, 8–10×4–5 μ, nonamyloid; basidia 4-spored, 21–26×5.5–7 μ; cheilocystidia abundant, clavate, apex acute to obtuse, 35–44×5–6.5 μ; hairs on stipe long, thick-walled, septate, 250–370×4.5–7 μ, pale yellow under the microscope; hairs on cap-surface similar.

Hab. On dead grass stems, Seta-cho, Omi, May 28, 1952.

Distr. Europe. New to Japan.

(17) **Hygrophorus** (Hygrocybe) **coccineus** Fr. sensu Ricken, Blätterp. 23 (1915).

Pileus 2–5cm broad, obtusely conic with a slightly incurved margin when young, obtusely umbonate with a spreading margin in age, margin sometimes irregular; surface smooth, glabrous, not viscid, deep blood red ("scarlet red[1]), nopal red or

* 滋賀大學學藝學部生物學研究室. Biological Institute, Faculty of Liberal Arts, Shiga University, Otsu, Shiga Prefecture.

1) All color names within quotation marks are taken from R. Ridgway: Color standards and color nomenclature, (1912).

carmine") fading to dull yellowish red when old, margin scarcely striatulate; context subconcolorous with the surface or paler, fragile, waxy, odor none; lamellae adnate to adnexed often with a decurrent tooth, ventricose, thick, waxy, 3-10 mm broad, edges even, distant to subdistant (L=19-28 (38); l=1-3), yellowish orange near the edge, dull yellowish red (with a purplish tinge) toward the base, or pale yellow over all; stipe 2.5-6 cm long 3-8 (14) mm thick, subequal or tapering downward, stuffed to hollow, often flexuous, glabrous, or more or less fibrillosely striate, glistening, fragile, not viscid, concolorous with the surface or paler, yellowish toward the base, base sometimes whitish; spores white in deposits, ellipsoid, 7.5-10.5×4-5 μ, nonamyloid; gill-trama of subparallel hyphae, the cells (5.5)-9-13 μ broad; basidia 4-spored, (37)-44-60×7.5-9 μ.

Hab. Gregarious among moss or *Sasa*, near Chausuyama, Otsu, April 14, 1952.

Distr. Europe, North America, Japan.

The illustrations of *Hygrophorus coccineus* Fr. by Konrad and Maublanc (Ic. Sel. Fung. **1**: pl. 383 (1924)) figured the fungus very well, but they described the cap-surface of this species as viscid. Smith and Hesler (Lloydia **5**: 37 (1942)), however, used the above name in Ricken's sense to the specimens from near Lyon, France and California, U. S. A. which lack the true viscidity, and my material described above appears to be identical with them. Imai described the cap of *H. coccineus* as viscid, and if the presence of a gelatinous pellicle in his specimens is demonstrated, it must be different from my fungus.

Fig. 1. *Hygrophorus coccineus* Fr. 1 spores. *Inocybe asterospora* Quél. 2 spores; 3 pleurocystidium. *Lactarius subumbonatus* Lindgr. 4 spores. *Crinipellis stipitarius* Pat. 5 Cheilocystidia; 6 spores. (×1000)

(18) **Lactarius subumbonatus** Lindgreen, in Bot. Not. 193 (1845).

Illustrations: Cooke, Ill. Brit. Fungi, **7**: pl. 986, f. A (1888-1890); Gillet, Champ. Fr. **4**: pl. 531 (1893); Massee, Brit. Fungi, pl. 14, f. 5 (1911).

Pileus 1.5-4 cm broad, convex then plane, at length depressed, often with a

minute umbo at the center; surface moist, rugose-wrinkled azonate, orange brown, darker (dark cinnamon) toward the center, somewhat powdery when dry; margin at first involute, then spreading, often wavy, slightly translucent striate at the margin when wet; latex white, mild, plentiful, not changing color; context subconcolorous, odor pleasant; lamellae adnate to more or less decurrent, often forked near the stipe, close to crowded (L=31-41; 1=1-3), 3-5 mm broad, edges even, color orange brown (vinaceous tawny); stipe 1.5-3.5 cm long 3-6 mm thick, equal or attenuated downward, subconcolorous, glabrous, but appears as powdery, hollow, base often strigose; spores white in deposits, globose to subglobose, punctate, 6.5-7.5 μ or 7-8×6-7 μ, amyloid; basidia 4-spored, 33-40×9-10 μ; pleurocystidia 75×11 μ.

Hab. Scattered to gregarious, among fallen leaves or mosses in woods, Miidera, Otsu, April 19, 30, and May 12, 1952.

Distr. Europe, North America. New to Japan.

On the spore-surface of the present fungus the finely reticulate structure is observed after the iodine test was made with Melzer's reagent.

(19) **Inocybe asterospora** Quélet, in Bull. Soc. Bot. Fr. **26**: 50 (1879)——*Agaricus asterosporus* Cooke, Handb. Brit. Fungi, Ed. **2**: 156 (1883)——*Astrosporina asterospora* Rea, Brit. Basid. 210 (1922)——*Clypeus subrimosus* Karst. Symb. Myc. Fenn. **28**: 38 (1888)——*Inocybe subrimosa* Sacc. Syll. Fung. **9**: 100 (1891).

Illustrations: Cooke, Ill. Brit. Fungi, **3**: pl. 385 (1884-1886); Konrad et Maublanc, Ic. Sel. Fung. **5**: pl. 105 (1929); Farlow, Ic. Farlow pl. 52, top fig. (1929); Lange, Fl. Ag. Dan. **3**: pl. 117, f. G (1938).

Pileus 2-5.5 cm broad, campanulate to convex, becoming nearly plane and finally depressed around the obtuse umbo; surface not viscid, silky fibrillose, becoming rimose to the umbo, the fibrils often recurving to form conspicuous fibrillose scales which scattered near the disc, color chestnut brown to bister, often splitting at the margin with age; context pallid, thick at the disc, odor somewhat earthy; lamellae adnate to nearly free, ventricose, close to subdistant (L=60-72; 1=1-3), sometimes forked, 3-5-7 mm broad, pallid then cinnamomeous, edges even, mealy; stipe 3-5.5 cm long 2-7 mm thick, equal, base slightly marginately bulbous, cylindric, brownish, whitish at the apex, streaked with silky fibrils, velvety-pruinate, solid to hollow; spores ferruginous in deposits, stellately-nodulose, 9-11.5×6.5-8 μ (or 7-9×4.5-6 μ, rarely 15×6.5 μ); basidia

tetrasporous, 28–33×9.5–11 μ (or 22–27×7.5–10 μ); cheilocystidia fusoid ventricose, apices obtuse and often incrusted, the walls above the inflated portion slightly thickened, 44–67×17–22 μ; pleurocystidia similar, 37–74×19–22 μ.

Hab. Gregarious to scattered, on the ground, near Asaiyama, Otsu, June 30, 1951; Shiga Univ., Otsu, June 21, 1952. Common.

Distr. Europe, North America, Australia and Japan.

This is a very outstanding species in its brown, rimose cap, bulbous stem and spores with strongly prominent projections. It is very abundant in the rainy months of the early summer (June to July) in Otsu and the outskirts.

(20) **Stropharia rugósoannulata** Farlow f. **lutea** Hongo, f. nov.

A typo pileo colore pallide luteo differt.

Pileus 5–10 cm broad, convex then expanded; surface slightly viscid when wet, smooth, glabrous, dull yellowish ("ochraceous buff" to "cream buff"), white fibrillóse at the margin when young; margin inrolled at first; context white, thick at the disc, odor slight; lamellae slightly adnexed or almost adnate, crowded (L=±95; l=3–7), 7 mm± broad, ventricose, at first whitish, then grayish with a violaceous tinge, at last becoming fuscous, edges white fimbriate; stipe 8–10 cm long 12–15 cm thick at the middle portion, slightly thickened downward, subconcolorous and silky fibrous below the annulus, white and bearing floccose masses above it, solid but soft within, with white rhizoid; annulus superior, creamy white, easily separable, appearing double, the lower membrane greatly thickened, radiately splitting on the edge, the upper membrane or upper side of annulus rugosely grooved; spores dull yellowish brown in KOH under the microscope, slightly flattened, subovate to slightly inequilateral in side view, ovate in face view, with a hyaline germ pore at the apex, smooth, 9.5–13.5×6–7.5×6.5–8 μ; basidia 4–spored, 26–33×7.5–10 μ; pleurocystidia clavate to fusiform with a elongated or papilliform projection at the apex, 39–55×11–11.5 μ, abundant; cheilocystidia similar, 29-39×10.5–12 μ.
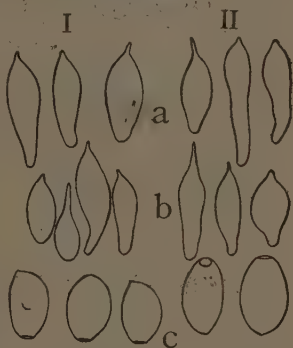
Fig. 2.
I *Stropharia rugosoannulata* Farlow f. *lutea* Hongo.
II *Stropharia rugosoannulata* Farlow.
a pleurocystidia (×400); b cheilocystidia (×400); c spores (×1000).

Hab. Solitary, among grasses or herbs by roadsides, Seta-cho, Omi, May 11, 1952 (—type specimen, in Inst. Phytopath. Univ. Kyoto); June 15, 1952.

Distr. Endemic.

Stropharia rugosoannulata Farlow was found at Chausuyama, Otsu, May 14, 1952, and I compared the material with the above collections in all respects, but I couid not find any differences between these materials except the color of the cap-surface. The present form is easily distinguished from the species in the dull yellowish color, and bears some resemblance to *Rozites caperatus* in appearance. *Storopharia subcaperata* Farlow et Burt has a similar color but apparently differs in the stipe being squamulose and in the ring not radiately splitting. Recently Singer has considered *St. rugosoannulata* Farlow as a synonym of *St. Ferrei* Bresadola and transfered this to the genus *Naematoloma*. (The "Agaricales" (Mushrooms) in modern taxonomy.—Lilloa, **22**: 5-832 (1949)). If Singer's opinion is accepted, we must use the following name to th present form:

Naematoloma Ferrei (Bres.) Singer f. **luteum** (Hongo) comb. nov.

---

(16) **ニセホウライタケ**（新稱）。枯れたイネ科の草本の莖に生ずる小形のきのこで傘の表面には褐色纖維を被り，且つ同心圓状の環紋をあらわすのが特徴である。

(17) 血紅色，蠟細工樣のきわめて美麗なる種類である。筆者の標品に於ては傘の表面には粘性はみとめられなかつたが，今井博士報告によれば氏の標品(ベニヤマタケ)に於ては粘性を有していたという。然し乍ら *Hygrocybe* 亞屬に於ては傘の粘性有無が極めて重要な分類の標準となるのであるから，今井博士の菌と筆者の菌とは同一種とみなし難いようである。尙 Fries 氏の原記載によれば本菌は粘性を有するものなる故，筆者は *Hygrophorus coccineus* Fr. なる學名を Ricken 氏の意味に於て用いた。

(18) **ヒメチチモドキ**（新稱）。チチタケ *Lactarius volemus* Fr., ヒメチチタケ *L. subdulcis* Fr. などに近い種類であるが小形である。乳液は白色で變色することなく，辛味はない。

(19) **ササナミニセトマヤタケ**（新稱）。外觀アセタケ *Inocybe rimosa* (Fr.) Quél. に似るが胞子にいちじるしい突起をそなえやや星形をしているので容易に區別される。

(20) **キサケツバタケ**（新稱）。サケツバタケ *Stropharia rugosoannulata* Farlow の一品種で傘が汚黃色を呈する點に於て容易に區別せられる。顯微鏡的な特徵は兩者ほとんど同樣である。

朝比奈泰彦*: 大興安嶺の地衣類に追加す

Yasuhiko ASAHINA*: An addition to the SATO's Lichenes Khinganenses (Bot. Mag. Tokyo, 65: 172)

最近發行になつた植物學雜誌 Nos. 769-770 で佐藤正已君は 1942 年に吉良教授が採集された北部大興安嶺の地衣 28 種を檢定された。筆者はその2年前即 1940 年に滿鐵沿線の藥用植物調査に參加した際興安驛と博哈圖驛との中間から西南 40-50 キロの尾根をつたつて地衣を採集した。此地方は吉良教授の採集地よりも遙に南に偏し高度も2000米以下で殆ど頂上迄 *Betula* や *Larix* の疎林が續き其合間に腰を没する程度の草原をなし地上生の地衣を目標にした筆者は寧ろ失望したのであるが兎に角僅少の露地や岩石の破れ目を尋ねて若干の獲物があつた。若干重復するものもあるが分布上重要であるから一括して記錄して置く。

Cladonia rangiferina (L.) Web. 基準型

Cladonia silvatica (L.) Harm. f. *sphagnoides* Flk. 全部此品種で PD 反應は比較的微弱，往々 PD− と誤認し易い。

Cladonia alpestris Rabenh. PD− で歐州產の基準型と一致する。

Cladonia Floerkeana (Fr.) Sommerf.

var. *intermedia* Hepp

var. *chloroides* (Flk.) Wain. f. *carcata* (Ach.) Nyl.

他の地衣の群落から選び出した貧弱な標本であるが明に上記二變種を認める。

Cladonia bacillaris (Del.) Nyl

多くは無子器で子柄は單一，尖銳で *Cl. coniocraea f. ceratodes* と混生し中々區別がつかない。PD− とバルバチン酸を檢出して確認した。

Cladonia digitata Schaer. 主として f. *glabrata* Del. である。

Cladonia pleurota (Flk.) Schaer. 有子器，無子器の各種の完全な標本。

Cladonia amaurocraea (Flk.) Schaer.

f. *craspedia* (Ach.) Schaer.

f. *tenuisecta* Wain.

f. *fruticulescens* Norrl.

非常に多產し上記3品種を區別することができる。

Cladonia furcata (Huds.) Schrad.

var. *racemosa* (Hoffm.) Flk. この變種は寧ろ少數。

var. *pinnata* (Flk.) Wain f. *regalis* Flk.

* 資源科學研究所. Research Institute for Natural Resources, Tokyo.

これは非常に發達し枝條も太く且つ往々縱裂する。

Cladonia scabriuscula (Del.) Leight. f. *cancellata* Müll. Arg. 標本多數，大形で發育良好。

Cladonia cenotea (Ach.) Schaer. 有子器のものを含む。

Cladonia subcariosa Nyl.

此標本は有子柄，群落の周邊に *Cl. pityrea* (PD+赤色) らしき夾雜あり。

Cladonia gracilis (L.) willd. var. *dilatata* (Hoffm.) wain. 此種一色であつた。

Cladonia cornuta (L.) Schaer. 標本は貧弱であるが此種のものと判定する。

Cladonia pyxidata (L.) Fr.

var. *neglecta* (Flk.) Mass. f. *lorypha* Ach.

var. *pocillum* (Ach,) Flot.

var. *pachyphyllina* (Wallr.)

アルカリ地帶で見逃すことのできない標兆植物で簡體も多く，發育も十分である。

Cladonia chlorophaea Spreng. f. *centralis* Asahina 盃の中央から更に小盃を發芽するもの。

Cladonia conista (Ach.) Robbins

これは *Cl. conistea* Asahina と間違へてはならぬ。コツプ狀の盃は相當大きく中形の *Pyxidata* 位ある長針狀無色結晶がでるので區別される

Cladonia fimbriata (L.) Fr. 標本は貧弱である

Cladonia cornuto-radiata *Coem.*

f. *radiata* (Schreb.)

f. *furcellata* Hoffm.

日本や朝鮮からはまだ確認されて居ない。

Cladonia coniocraea Flk. f. *ceratodes* Flk.

種々の發育の程度のものがあり細小のものは *Cl. bacillaris* の無子器のものと混雜して居る。

Cladonia nemoxyna (ach.) Coem.

Cladonia botrytes (Hag.) Willd. 發達のよい標本である。

Stereocaulon tomentosum Fr. 標本多數發達よろし。

Nephroma Asahinae Zahlbr.

これと同定するは可なり躊躇したがやはり本種と認定するより外はない。臺灣阿里山を type locality とし日本全土に分布をもつ本種が大興安嶺に現われたとすればこれは東亜の一標兆地衣と云はねばならない。

Peltigera canina (L.) Willd.　　規準型

Peltigera spuria (Ach.) DC.

近頃は *P. canina* の一型とする人もあるがここでは區別した。

Peltigera rufescens Nyl.　これも *P. canina* の一型とされたが明に區別できる形態をもつ。

Pellgera horizontalis (L.) Hoffm.　子器の形でハツキリ區別できる，裏面の脈は比較的不明で暗褐色の毛氈が殆ど邊緣迄及び居る。

Psora Asahinae Zahlbr.　露出岩石の割目で一小群落を發見した。

Leptogium saturninum (Dicks.) Nyl.　無子器で確證できないが葉體の形狀，裂芽のつき工合できめた。日本からはまた記錄されない。

Collema pustuligerum Hue　日本產のもので Hue が命名したもの，この同定が間違なければこれも東亞の特產品と云へる。

Lecanora muralis Rabh.

Cetraria crispa Nyl. var. *japonica* Asahina

髓が PD+赤色で歐州產基準品とは含有成分に差がある。

Parmelia manshurica Asahina type locality

Parmelia obscurata (Ach.) Bitter 日本からはまば記錄されない。

Evernia mesomorpha Nyl.　粉芽のある基準品。

Alectoria jubata (L.) Ach.　普通品，無子器。

Usnea longissima Ach. var. *tenuis*　本種については別に記述する。

Usnea comosa (Ach.) Röhl.　本種についても別に記述する。

Physcia melops (Duf.) Nyl.　有子器であり可なり完全の標本であるが，現在筆者の材料からは一應この種に充てるより外に力法はない。

Xanthoria fallax Du Rietz.

Corrections for Larger fungi of the provinces of Omi and Yamashiro (3) (**27**: 189–194).

				誤 for	正 read
p. 189	line	5	from below	採集されたことか	採集されたことが
p. 190	〃	3		III	Ill,
p. 〃	〃	6	from below	Mcologia	Mycologia
p. 191	〃	19		4-spard	4-spored
p. 〃	〃	12	from below	ジヤマイカ島のあとにカツコを加える	
p. 〃	〃	7	〃	N. Ohga	M. Ohga
p. 192	〃	5	〃	編すべきか	編入すべきか
p. 194	〃	15	〃	their habitats	their natural habitats

○尾瀬原並に附近の地衣相（朝比奈泰彦）*: Yasuhiko Asahina*: Lichen vegetation of Oze-ga-hara and its vicinities.

尾瀬濕原の地衣相は比較的單純で *Cladonia rangiferina* (L.) Web. と *Cl. mitis* Sandst. とが *Cl. pseudoevansi* Asahina と混生するのが目立つて居る。殊に *Cl. pseudoevansi* は菖蒲平や至佛山の高所で漠大な群落を構成し其參差した圓頂を眺めるのは興味深い。只見川上流沿岸の森林地帶には主として大形葉狀地衣と若干の赤味の *Cladonia* を見ることができる。至佛頂上附近で從來 *Cladonia tenuis* (Flk.) Harm. と考へられて居たものを採集し精査した處，歐州產の *Cl. tenuis* とは若干不一致の點があり寧ろ北米產の *Cl. subtenuis* (Des Abb.) Evans に似た點が多いので之を Evans 博士に送り意見を求めた處，同博士も此標本の樣な地衣を Connecticut の原野で見るとすれば *Cl. subtenuis* と稱するに躊躇しないと返事して來た。*Cl. subtenuis* の一つの特徵である粉子器內の粘液が紅色を呈することは至佛の標本では未確認であるが先頃鳥取產の標本で生駒義篤氏が確認し日本に *subtenuis* の產する事は間違ないので至佛產のものもこれに同定した。從來 *Cl. tenuis* に片附けた邦產標本は何れも *subtenuis* に繰り入れる方がよいと思ふ。拙著日本之地衣第一册クラドニア篇を引用さるる人は此點注意を乞ふ次第である。

Cladonia nipponica Asahina（日本之地衣第 1 册：121）も至佛頂上附近に出現するがこれは元は *Cl. Boryi* Tuck. に充ててあつたが之よりも表層が滑かで且つ硬いので Evans 博士も首を傾けたものである。一應 *nipponica* なる獨立種として檢討すべきであろう。同じく至佛頂上附近で *Cl. carassensis* Wain. のよき標本が得られた。これは最近迄 *Cl. japonica* Wain. の名で通用して居たが數年前 Evans が斷然これをブラジル產の *Cl. carassensis* と同定した。從來北部日本の高山にのみ出現し *japonica* の名はあつても可なり稀品で形体は *Cl. crispata* に似て Pd+ 橙黃色（タムノール酸含有）で區別される。此種については別の處で詳論したい。

下の地衣目錄を見てもわかる如く尾瀬原及附近の地衣相は本邦中部山岳地帶のそれと全く一致し特產と稱されるものはない。

尾瀬原附近で採集された大形地衣目錄

List of Macro-Lichens found in Oze-ga-hara and its vicinities.

番號は筆者の標本番號

Dermatocarpon miniatum (L.) Mann	尾瀬原東電小屋附近水邊	5046
Calicium parietinum Ach.	尾瀬原上田代	5036
Collema japonicum (Müll. Arg.) Hue	尾瀬原森林	5040
Leptogium tremelloidea (L. fil.) S. F. Gray var. *azureum* Nyl.	〃	5048

* 資源科學研究所. Research Inst. Natural Resources, Tokyo.

Leptogium cyanescens (Ach.) Körb.	尾瀬原森林	5049
Lobaria pulmonaria (L.) Hoffm. var. *orientalis* Asahina	〃	5050
L. sachalinensis Asahina var. *kasawaensis* Asahina, J. J. B. **23**: 68 (1949).	〃	5051
L. nipponica Asahina	〃	5052
L. pulmonaria (L.) Hoffm. var. *spathulata* (Inumaru) Asahina	〃	5053
Nephroma squamigerum Inumaru	〃	5054
Peltigera Praetextata Wain. var. *subcanina* Gyeln.	至佛山森林帶	5056
Mycoblastus sanguinarius Norm.	至佛山頂上附近	5047
Rhizocarpon geographicum DC.	〃	5073
Baeomyces placophyllus (Lam.) Ach.	富士見峠	5035
Glossodium japonicum Zahlbr.	至佛山森林帶	5044
Cladonia rangiferina (L.) Web.	尾瀬原，至佛山頂附近	5001
Cl. rangiferina f. *tenuior* Del.	〃	5003
Cl. silvatica (L.) Harm. f. *sphagnoides* Flk.	〃	5002
Cl. mitis Sandst.	〃	5004
Cl. pseudoevansi Asahina.	尾瀬原，菖蒲平，至佛山頂附近	5005
Cl. alpestris (L.) Rabenh.	至佛山頂附近	5006
Cl. subtenuis (Des Abb.) Evans.	至佛山八合目附近	5007
Cl. pleurota (Flk.) Schaer. var. *hygrophila* Asahina.	尾瀬原，至佛山森林帶	5008
Cl. Floerkeana (Fr.) Sommerf. var. *chloroides* (Flk.) Wain.	尾瀬原	5010
Cl. Floerkeana var. *alpina* Asahina.	至佛山頂附近	5011
Cl. amaurocraea (Flk.) Schaer. f. *oxyceras* (Ach.) Oliv.	至佛山頂附近	5012
Cl. pseudostellata Asahina	〃	5013
Cl. nipponica Asahina.	〃	5014
Cl. scabriuscula (Del.) Leight. f. *sublaevis* Sandst.	〃	5015
Cl. crispata (Ach.) Flot. var. *elegans* (Del.) Wain.	〃	5016
Cl. squamosa (Scop.) Hoffm. v. *muricella* (Del.)		

Wain. f. *myosuroides* Wallr.	至佛山頂附近	5017
Cl. carassensis Wain. f. *pseudocrispata* Sandst.	〃	5018
Cl. carassensis Wain. f. *regularis* Wain.	〃	5079
Cl. turgida (Ehrht.) Hoffm. f. *stricta* Nyl.	〃	5019
Cl. gracilis (L.) Willd. v. *elongata* Flk.	〃	5020
Cl. conistea Asahina.	至佛山森林帶	5023
Cl. merochlorophaea Asahina	〃	5024
Cl. merochlorophaea f. *inactiva* Asahina.	尾瀨原	5025
Cl. dissimilis Asahina	至佛頂上	5026
Cl. cyanipes (Sommerf.) Th. Fr. f. *campestris* Wain.	〃	5027
Cl. metacorallifera Asahina var. *reagens* Asahina.	〃	5080
Cl. cornuta (L.) Schaer.	至佛山森林帶	5022
Stereocaulon nigrum Hue.	菖蒲平	5075
Icmadophila ericetorum (L.) Zahlbr.	富士見峠，至佛山森林帶	5046
Haematomma ochrophaeum (Tuck.) Mass.	尾瀨原森林	5045
Parmeliopsis hyperopta (Ach.) Arn.	尾瀨原	5065
Parmelia pertusa (Schrank) Schaer.	尾瀨原	5057
P. homogenes Nyl. f. *tenuior* Asahina	富士見峠	5058
P. entotheiochroa Hue.	〃	5059
P. sublaevigata Nyl.	尾瀨原森林	5060
P. mundata Nyl. f. *sorediosa* Bitter.	山鼻小屋附近	5061
P. physodes (L.) Ach.	〃	5061 c.
P. homogenes Nyl.	尾瀨原森林	5062
P. olivacea Ach.	〃	5063a
P. Huei Asahina.	〃	5063b
P. pseudophysodes Asahina.	至佛山森林帶上部	5064
P. saxatilis Ach. f. *divaricata* Del.	山鼻小屋	5068
Anzia japonica Müll. Arg.	尾瀨原森林	5033a
A. opuntiella Müll. Arg.	至佛山頂附近	5033b
Cetraria crispa Nyl. var *japonica* Asahina.	〃	5037
C. islandica Ach. var. *orientalis* Asahina.	〃	5038
C. rugosa Asahina.	至佛山森林帶	5039
Evernia mesomorpha Nyl. f. *esorediosa* Müll. Arg.	尾瀨原森林	5043
Alectoria nidulifera Norrl.	東電小屋附近	5028
A. jubata (L.) Ach.	山鼻小屋附近	5029

Alectoria sulcata (Lev.) Nyl.	東電小屋附近	5030
Oropogon asiaticus Asahina.	山鼻小屋附近	5055
Cornicularia pseudcsatoana Asahina.	〃	5041
Ramalina Asahinana Zahlbr.	至佛山森林帶	5070
R. Roesleri (Hochst.) Nyl.	山鼻小屋附近	5071
Usnea longissima Ach.	至佛山森林帶	5078
U. diffracta Wain.	〃	5078b
Rinodina pyrina (Ach.) Arn.	尾瀬原	5081
Physcia cfr. *melops* (Duf.) Nyl.	至佛頂上	5069
Anaptychia podocarpa (Bel.) Mass.	尾瀬原森林	5031
A. palmatula (Michx.) Wain.	東電小屋附近	5032
Thamnolia vermicularis (Sw.) Ach.	至佛山頂上	5077
T. subvermicularis Asahina.	〃	5077b

○ベンケイソウの學名（原寛） Hiroshi HARA: The identity of *Sedum erythrostictum* Miquel.

Sedum erythrostictum Miquel (1866) とゆうものは Maximowicz (1883) が *S. Telephium* β. *purpureum* L. の異名に下して以來, Praeger (1921), Fröder-ström (1930) 等の專門家もこれに従つてきた。私は十數年前からこの同定に疑を抱き，その原記載は反つてベンケイソウに符合する様に思つたが，花が 1 1/2 lin. (=ca. 3mm)を餘り超えないとゆう點で一致せず決しかねていた。原標本を見てこの疑問を解決したいと昨年暮オランダ，ライデンの國立博物館へ問合せた所，隨分探したが原標本が行方不明であるとの返事であつた。ところが小泉博士が 1926 年パリーの Hamet 氏宅でこの標本を見て居られることが分り再び探して貰つた結果，古く Hamet 氏に借したままになつていた事が明かになり，今春5月その標本は無事約 40 年振りにライデンに戻された。更に Steenis 博士の好意によつて2枚ある原標本の一枚 (No. 901, 190-426) は 9 月東大に送られて來て借覧することができた。これを見ると花瓣は長さ約 5 mm あつて原記載は書き誤と思われ，すべての點で栽培されているベンケイソウとよく一致する。この點 Masters (1878) の見解の方が Maxim. より正しかつた。ラベルの一枚には「ベンケイサウ」と墨で書かれてあり當時日本人がベンケイソウとして Siebold に渡したものと推定される。本州中部の山地に產し牧野博士 (1897) がムラサキベンケイソウと呼ばれたものは，古くから日本の庭園で栽培されているベンケイソウの自生形と私は考えている（東大理學部紀要 Sect 3, **6**: 63, 1952 参照)。*Sedum Telephium* 群は東亜において形態的にも細胞學的にも著しく分化して居り，ベンケイソウはその一であ

り，大陸側の近似種との再検討が必要である。しかし現在の知識ではベンケイソウの學名は次の樣に整理される。

Sedum erythrostictum Miquel in Ann. Mus. Bot. Lugd.-Bat. **2**: 155 (1866)-Masters in Gard. Chron. n. s. **10**: 337 (1878). *S. alboroseum* Baker in Saunders, Refug. Bot. **1**: t. 33 (1868)-Regel in Gartenfl. **21**: 2, t. 709, f. 4–5 (1872)-Maxim. in Bull. Acad. Sci. St.-Pét. **29**: 140 (1883)-Matsum., Ind. Pl. Jap. **2** (2): 166 (1912)-Praeger in Journ. Roy. Hort. Soc. **46**: 88, fig. 36d & 41 (1921)-Hubbard in Bailey, Stand. Cycl. Hort. **3**: 3131 (1922)-Hara in Journ. Fac. Sci. Univ. Tokyo sect. 3. **6** (2): 63 (1952). '*S. Telephium* var. *purpureum* L.': Maxim., l. c. 141 (1883), p. p.-Makino in Bot. Mag. Tokyo **11**; [428] (1897). '*S. Telephium* L.': Matsum., l. c. 169 (1912), p. p.——*S. Telephinm* subsp. *alboroseum* (Baker) Fröderström in Act. Hort. Gothob. **5**: app. 61 (1930), p. p.——*S. Okuyamae* Ohwi in Bull. Sci. Mus. Tokyo **26**: 9 (1949).

f. **variegatum** (Masters) Hara, comb. nov. *S. alboroseum* fol. *variegatis* Regel, l. c. t. 709, f. 6 (1872). *S. erythrostictum* var. *variegatum* Masters. l. c. 337 (1878). *S. alboroseum* f. *foliis medio-variegatis* Regel ex Praeger, l. c. 90 (1921). *S. alboroseum* var. *variegatum* Hubbard, l. c. 3131 (1922).

By the courtesy of Prof. C. G. G. J. van Steenis of the Rijks-herbarium in Leiden, one (No. 901, 190–426) of the two original specimens of *Sedum erythrostictum* Miquel was sent to me on loan. By examining it, I noticed that it perfectly agrees with *S. alboroseum* Baker which has been well-known in Japanese gardens from old times.

Its petals are about 5mm long in that specimen, although its flower was described as '1 1/2 lin. parum superans.'

Correction for Notes of Japanese larger Fungi (3) (27, 159–163)

				誤 for	正 read
p.	159	line	5	somotimes	sometimes
p.	〃	〃	25	fresh	flesh
p.	161	〃	4	×9–8 μ	×6–8 μ
p.	〃	〃	6	1950; 1950;	1950;
p.	〃	〃	18	(3) 5-130 cm	(3) 5-13 cm
p.	〃	〃	30–31	stipe 5-12 cm …ventricose;	を削除する
p.	〃	〃	33	if touched equal	if touched, equal
p.	162	〃	10	Ang.	Aug.
p.	163	〃	3	少し	少しく
p.	〃	〃	8	0.9±0.03 μ	0.96±0.03 μ
p.	〃	〃	11	6.03±0.24	6.68±0.24
p.	〃	〃	15	15–18×9–13 μ	15–18×9–12 μ

植 物 研 究 雜 誌

THE JOURNAL OF JAPANESE BOTANY

第 27 巻

第 1 號～第 12 號

昭 和 27 年 1 月～12 月

Vol. 27 (Nos. 1～12)

January～December

1 9 5 2

津 村 研 究 所

Tsumura Laboratory

Tokyo

第 27 巻（昭和 27 年）著者名索引

Author Index to Vol. 27 (1952)

（本論文の頁は各行右端にはなして示し，雑録其他の頁は表題にすぐつづけて示す）

代金拂込

代金切れの方は半ケ年代金（雑誌6回分）384 円（但し送料を含む概算）を爲替又は振替（手數料加算）で東京都目黒區上目黒 8 の500　津村研究所（振替 東京 1680）宛御送り下さい。

投稿規定

1. 論文は簡潔に書くこと。
2. 論文の脚註には著者の勤務先及びその英譯を附記すること。
3. 本論文，雜錄共に著者名にはローマ字綴り，題名には英譯を付けること。
4. 和文原稿は平がな交り，植物和名は片かなを用い，成る可く 400 字詰原稿用紙に横書のこと。歐文原稿はタイプライトすること。
5. 和文論文には簡單な歐文摘要を付けること。
6. 原圖には必ず倍率を表示し，圖中の記號，數字には活字を貼込むこと。原圖の說明は 2 部作製し 1 部は容易に剝がし得るよう貼布しおくこと。
7. 登載順序，體裁は編輯部にお任かせのこと。活字指定も編輯部でしますから特に御希望の個所があれば鉛筆で記入のこと。
8. 本論文に限り別册 50 部を進呈。それ以上は實費を著者で負擔のこと。
   a. 希望別刷部數は論文原稿に明記のもの以外は引き受けません。
   b. 雜錄論文の別刷は 1 頁以上のもので實費著者負擔の場合に限り作成します。
   c. 著者の負擔する別刷代金は印刷所から直接請求しますから折返し印刷所へ御送金下さい。着金後別刷を郵送します。
9. 送稿及び編集關係の通信は東京都文京區本富士町東京大學醫學部藥學科生藥學教室，植物分類生藥資源研究會，藤田路一宛のこと。

編集員

Members of Editorial Board

朝比奈泰彥 (Y. ASAHINA)
編集員代表 (Editor in chief)

藤田路一 (M. FUJITA)　原　寬 (H. HARA)
久内清孝 (K. HISAUCHI)　木村陽二郎 (Y. KIMURA)
小林義雄 (Y. KOBAYASI)　前川文夫 (F. MAEKAWA)
佐々木一郎 (I. SASAKI)　津山　尙 (T. TUYAMA)

All communications to be addressed to the Editor
Dr. **Yasuhiko Asahina**, Prof. Emeritus, M. J. A.
Pharmaceutical Institute, Faculty of Medicine, University of Tokyo,
Hongo, Tokyo, Japan.